

『巨匠とマルガリータ』と『ファウスト』の比較考察の試み

— 悪魔ヴォランドとメフィストフェレスはどこが違うのか —

Одна попытка сравнительного изучения

«Мастера и Маргариты» и «Фауста»

- В чём разница между Чёртом Воландом и Мефистофелем? -

文学研究科社会学専攻博士前期課程修了

大 川 由 紀 子

Yukiko Okawa

- I 序論
- II 悪魔ヴォランドとメフィストフェレス
- III メフィストフェレスとは
- IV ヴォランドとは
- V 両者の決定的な違い
- VI 結論

I. 序論

20世紀ロシア作家ミハイル・アフナーシエヴィチ・ブルガーコフ Михаил Афанасьевич Булгаков (1891~1940) の代表作“Мастер и Маргарита”『巨匠とマルガリータ』(1928~1940)のエピグラフに、ドイツ文学者ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe (1749~1832) の戯曲“Faust”『ファウスト』からの一節が引用されている。『ファウスト』第I部において、主人公であるファウストと、むく犬から本来の姿を現した悪魔メフィストフェレスが初めて言葉を交わす「書齋」の場において、ファウストがメフィストフェレスに次のように尋ねるシーンである(1335-37行)¹。

・『ファウスト』の引用は、ゲーテ『ファウスト』相良守峯訳、岩波文庫、1958より。
・『巨匠とマルガリータ』の引用に使用したテキストは、Михаил Булгаков“Мастер и Маргарита”
Азбука-классика2005より。なお、このテキストはБулгаков, М. А. Собр. Соч.: в 5 т. М., 1990. Т. 5に基づいて
いる。日本語は筆者訳。

¹ 「ファウスト」からの引用は()内に行数をアラビア数字で記す。

...Так, кто ж ты, наконец?

—Я— часть той силы, что вечно хочет зла и вечно совершает благо. [5]²

...それで結局お前は何者なのだ？

—私は絶えず悪を欲し、絶えず善を成し遂げる、あの力の一部です。

そしてこの会話で語られているように、『巨匠とマルガリータ』は、ヴォランドを筆頭とする悪魔一味が、1930年代のモスクワを舞台に善悪を成していくのである。

ブルガーコフが『巨匠とマルガリータ』のエピグラフとして『ファウスト』からの一節を引用したその訳とは何か？ゲーテの戯曲がブルガーコフに、『巨匠とマルガリータ』を創作する上で非常に重要な要素を与えていたからに違いない。本稿では、1世紀以上も時代の異なるこれら2作品の悪魔の類似点と相違点を比較することで、その要素は一体何であったかを検討してみたいと思う。

II. 悪魔ヴォランドとメフィストフェレス

作品『巨匠とマルガリータ』と『ファウスト』のどちらにおいても、悪魔の存在は非常に大きなものであった。ではまず、ヴォランドとメフィストフェレスの両悪魔が、作品の中にどのように登場したか、そしてその目的は何であったかを整理していきたい。

『巨匠とマルガリータ』の悪魔ヴォランド一味が、この作品の主な舞台となるモスクワへやってきた目的は、年に一度開催する悪魔の大舞踏会を開催する為である。また、女主人のいない一味は毎回、舞踏会の開催地で相手を探し出すことにしている。その条件として、開催地で生まれ育った者であること、王族の血を引いていること、そしてマルガリータという名前であることが挙げられ、今回見事に選ばれたのが、『巨匠とマルガリータ』の女主人公、マルガリータだったのである。

悪魔の大舞踏会で女主人を務め上げたマルガリータ。その褒美として彼女は、行方不明となっている、愛する巨匠を自分の元へ返してほしいと願い、悪魔ヴォランドは彼女の望みを叶えてやる。そこで初めて、悪魔ヴォランドと巨匠は出会うのである。悪魔と出会ったことにより、巨匠たちは以前の地下室での生活を取り戻す。ヴォランドの力なくして、巨匠はあの地下室での生活も、更には、永遠の安らぎが保障された隠れ家も手に入れることは出来なかった。しかし、そもそもヴォランド率いる悪魔一味がモスクワへやってきたのは、自分たちの開催する大舞踏会の為であったことを忘れてはならない。なぜなら、『巨匠とマルガリータ』と『ファウスト』の悪魔の登場の目的が、大きく異なるからである。

² 「巨匠とマルガリータ」からの引用は[]内に頁数をアラビア数字で記す。

『ファウスト』の悪魔メフィストフェレスがむく犬の姿をして地上に現れた理由は、まさにファウスト1人を目的としてである。そもそも『ファウスト』とは、《理性によって神のごとくならうと欲しながら、実はまさにそのような衝動によって自己完成に失敗し、動物以下の存在になり下がる可能性を秘めた人間の悲劇である》³。元は神的な霊⁴であるファウストは、地霊空間で活動していても、天上世界にいる主にとって下僕である。そして《人間は、神的能力である理性をもった物質界の唯一の存在として「この世の小さな神」ではあるが、同時に動物であるという内的矛盾に苦しんでいる。ファウストはこのような人間の代表例である。〈...〉この「二つの魂」をもったファウストの本質を的確に見抜き、かれに「塵あくたを食わせる」、すなわちかれを動物の段階に引きずりおろそうとするのがメフィストである》⁵。ファウストを自分の手下にするという主との賭けに勝つ為に、メフィストフェレスは、その対象となっているファウストの前に現れる。

そして本来の姿となった時、『巨匠とマルガリータ』のエピグラフとして引用されているあの言葉を発するのである。(1336-37行)

メフィストフェレス

常に悪を欲して、

しかも常に善を成す、あの力の一部分です。

こうして悪魔メフィストフェレスは、ファウストの欲求を全て叶えるべく、行動を共にする。《メフィストの役割は、こうして、ファウストに代わってファウストの本性を暴露し、ファウストの無意識の願望に従ってファウストの地上的物質的衝動を助長し、天上的精神的衝動をできるだけ麻痺させること》⁶であり、《メフィストは明らかに、理性と生が対立する地霊空間における生への誘惑者として登場》⁷する。それが結局、ファウストの愛した女性グレートヘンが破滅へと転落していくという悲劇の原因となるのである。

悪魔ヴォランドとメフィストフェレスの、作品からの退場の仕方にも、大きな違いがあることにも触れておきたい。

ファウストが死んだ時、メフィストフェレスは彼の魂を取り押さえようと試みる。しかし、天上世界から降りてきた天使たちに邪魔をされ、なかなか上手く事を運べない。天使たちの撒くバラの花び

³ 木村直司『ゲーテ研究』南窓社、1976。 p.370。同書によると、「ゲーテは、ファウストの死後に救われるものとして「魂」という言葉を使うのを避けていた。かれがその代わりに用いたのは、あくまで「霊」という言葉である。(p.372)」としており、本稿ではその考えに則る。

⁴ 同上。 p.371~372

⁵ 同上。 p.347

⁶ 同上。 p.369

⁷ 柴田翔『ゲーテ「ファウスト」を読む』岩波セミナーブックス11、1985。 p.140

らでメフィストフェレスは「おれの頭が焼ける、心臓も、肝臓も焼ける。⁸悪魔にまさる火だ。/地獄の火よりもずっとヒリヒリする。— (11753—55行)」と七転八倒するのである。そして、この天使たちの《毒をみな吹出物にして排出してしまい、悪魔の本性に戻って天使たちに立ち向かおうとしますが、時すでに遅く、手に入れたはずの魂（ファウストの魂：筆者注）は天使たちによって天上に運び去られて》⁹しまうのである。

メフィストーフェレス

さて誰のところにこれを訴えたものだろう。〈…〉

いい年をして、まんまと騙されやがった。〈…〉

骨折り損のくたびれ儲けとは、いい面の皮だ。〈…〉

最後におれの迷い込んだ馬鹿さ加減ときたら、

まったく並大抵のことじゃないや。（11832—43行）

長い間ファウストに尽くし続けても、その魂を手に入れることが出来なかったメフィストフェレス。彼はただ、《自分の権利を不当に失ったまま—天上のより高き原理に再び包摂されることなく—舞台から引き下がるのみ》¹⁰なのである。

一方、ヴォランド一味がモスクワを去る時はどうであったろうか？ヴォランドはモスクワを離れる前、ヨシュアの弟子レビ・マタイと次のような会話をする。

「〈…〉そして巨匠と一緒に連れて行き、彼に安らぎを与えることを（ヨシュアは：筆者注）お前に頼んでいるのだ。一体、あなたにとって難しいことがあるか、悪の霊よ？」

「難しいことなんて何もない。〈…〉行われるであろうと伝えよ。」 [375—376]

光の世界にいるヨシュアは悪魔ヴォランドに対して、決して命令口調ではないこと、つまり、2人の関係が主従関係ではないことがこの会話から窺えるであろう。ただし、2人の関係が対等とも見受けられるこのことに関しては、後に改めて検討してみたいと思う。

ヨシュアの頼みを聞き入れたヴォランドは、巨匠とマルガリータの2人を連れてモスクワを去るのである。先ほども述べたように、ヴォランドがモスクワに現れた理由は、大舞踏会の為であり、巨匠とマルガリータの救済の為ではない。悪魔の大舞踏会の開催という本来の目的を果たしたヴォランドは、メフィストフェレスと違って自分の権利を失っていないことは一目瞭然である。そしてヴォランドの権利は、彼が作品の中から姿を消すその瞬間まで変わらずに行使されている。

以上、両作品に登場する悪魔が、如何なる目的で登場し、そしてどのように退場したかを掻い摘ん

⁸ / は改行を表す。

⁹ 脚注7と同書。p.390

¹⁰ 同上。p.392

で紹介した。それでは、ヴォラントとメフィストフェレスという悪魔は一体どのような存在であったかを、より詳しく調べていきたい。尚、今回は主との主従関係が明らかとなっている悪魔メフィストフェレスについて述べた後、ヴォラントについて検討してみたいと思う。

Ⅲ. メフィストフェレスとは

そもそも、悪魔メフィストフェレスとは一体、何者なのであろうか？『ファウスト』第Ⅰ部「天上の序曲」で、メフィストフェレスは主のことを次のように語っている（352-53行）。

メフィストーフェレス

悪魔を相手に、あれほど人間らしく口をきいてくれるとは、
しかし大旦那として感心なものだ。

つまり作品『ファウスト』において、悪魔と主の関係が対等ではないことが分かる。水野氏は、メフィストフェレスと主の「天上の序曲」での会話から、2人の関係について、次のように述べている。《悪魔は、神の敵として、互に排除しようとする間柄と考えられるが、ここでは、神の家来衆にまじって、天国に来ている。これは、聖書ヨブ記（Buch Hiob1,6-12）の着想を借りている。悪魔は神の支配下にある》¹¹と。つまり、2人の関係は主従関係にあり、だからこそメフィストフェレスは主について、先ほどの言葉を口にするのである。

また、「書斎」の場面でメフィストフェレスが、ファウストが自殺を試みたことについて述べるところがある。ファウストは「ははあ、探偵がきみの道楽なんだな。」と言うと、メフィストフェレスは「私は全智、とはいかないが、いろんなことを知っていますよ。」と答える（1581-82行）。悪魔のこの言葉からも、彼の立場が全能の主よりは劣っているということが窺えるであろう。

では、メフィストフェレスの悪魔としての性格についてはどうだろうか？「天上の序曲」において、主はメフィストフェレスに向かって「およそ否定を本領とする霊どもの中で、いちばん荷厄介にならないのは悪戯者なのだ。」と言う（339-40行）。また、ファウストに自己紹介した時も、「私は常に否定をすところの霊なんです。（1338行）」と述べている。この点から、メフィストフェレスは否定する霊だと言える。そして先ほどの水野氏の論文には、この否定の霊に関して非常に興味深い見解がある。《悪魔には「後悔」や「懺悔」などという反省はありえないのである。否定する精神はただひたすらに追求されて、絶対化される。絶対化というのは、否定は自己には向けられないという

¹¹ 水野忠敏「ゲーテ・ファウストの登場人物 —その作像— 第一部」『広島大学文学部紀要』広島大学文学部[編]、1973.3. p.62~63

ことである。否定される対象は必ず他者であって、自己を含んでいない。これが、否定魔の本性である。》として、メフィストフェレスという悪魔は《自己絶対化と他者否定の二重構造》を持ち、《悪魔の否定する他者は、いつも人間である。》¹²とした。

自己絶対化ということは、自分に対して否定することもない。自分が良くない行いをしても、それを間違っていたとは認めず、自身の行動を省みない。ということは、心の葛藤は絶対にならないということである。つまり《悪魔には成長はなく、長い年月の体験を経たのちでも、理論は全く修正されることはない》¹³のである。

そして悪魔とはまた、破壊を誘う者でもある。グレートヘンはファウストに向かって次のように言う。「あの方がわたしどものところへ見えた時には、/わたしもうあなたが好きでないようにさえ思われるんですわ。(3496-97行)」このように彼女自身が認めているように、彼女にとって悪魔の存在は到底、受け入れがたいものであった。この場面をメフィストフェレスの側から解釈すると、《愛情で結びつく人間関係を、はばみ、破壊しようとする者》¹⁴としてメフィストフェレスは登場しているのである。

悪魔メフィストフェレスとは、人間を否定し、自身の理論には変化は無く、常に破壊や破滅を誘う者なのである。《メフィストは否定の霊であり、破壊の魔であるのですが、その否定と破壊の対象は何かと言えば、それは世界が間断なく生み出す生命に他なりません。メフィストは一方で生を賛美し、理性を否定して輝く生へと人間を甘やかに誘惑しながら、他方で生命の破壊にいそしむのです。》¹⁵しかし、悪魔とは決して否定や破壊にいそしむ悪者とだけとは言い切れないのではないだろうか。「天上の序曲」の場面で、主は次のように言っている(340-43行)。

主

人間の活動はとかく弛みがちなもので、
得てして無制限の休息を欲する。
だからわたしは彼らに仲間をつけてやって、
彼らを刺戟したり促したり、悪魔としての仕事をさせるのだ。

この言葉について、《天主は、絶対的の休息を否定し、活動つまり生命の働きを肯定します。そして理性を捨て行為へ跳躍せよと囁くメフィストは、たとえその背後に冷たい否定性を隠しても地霊空間における生命の働きを保つためには必要な道連れ、まさに必要悪》¹⁶だとする解釈がある。

¹² 脚注11と同書。p.46

¹³ 同上。p.47

¹⁴ 同上。p.58

¹⁵ 脚注7と同書。p.142

¹⁶ 同上。p.148

では、人間にとって、メフィストフェレスの存在とは如何なるものなのであろうか？まず、作品『ファウスト』には全体を通して2つの世界、つまり此岸と彼岸の世界が存在する。柴田氏はこの2つの世界を「地霊空間」と「天上空間」と名付けており、本稿でもこの命名を使用する。そして人間は此岸である地霊空間で生きている。その地霊空間は天上空間によって包括されているのだが、地霊空間で生きている者たちは、天上空間の存在を知らない。ファウストも「森林と洞窟」の場面で、地の霊に向かって「お前は、おれを次第に神々に近づけてくれるこの歓びの添えものとして、1とんだ仲間を付添わせてくれた。」と言っている（3241-43行）。これは、地霊がメフィストフェレスを自分の元に遣わしたのだと思っていることの表れである。実際は天上空間にいる主が、メフィストフェレスと賭けをして、悪魔をファウストの元へ遣わした。このことから分かるように、生きている人間にとっては地霊空間が全てなのである。

また、悪魔自身は霊なので、天上空間へも地霊空間へも行くことが出来る。しかし、「天上の序曲」の場面で人間の生活について不平を述べている点から、彼の活動の場が主に地霊空間であることが分かる。

主のいる天上空間を知らない人間たちが、地霊空間内で活動している霊を見たとしたら、どう思うであろうか？自分の存在している空間が全てだと考えている者たちにとって、その霊は異質である。そしてその霊が人間では成し得ない力を持っていたら、恐怖を感ずるのではないだろうか？以上の点から筆者は、地霊空間内においてのみ、悪魔メフィストフェレスの存在は絶大であると位置づけたいと考える。

IV. ヴォランドとは

では、『巨匠とマルガリータ』に登場する悪魔ヴォランドはどうだろうか？

『ファウスト』では、人間を否定し、自身の理論に変化は無く、常に破壊や破滅を誘う者として悪魔メフィストフェレスは登場した。「書齋」の場面で、メフィストフェレスはファウストに扮して、ファウストの元を訪れた学生と会話をする。そこで学生は「ひとつこの記念帳にお願いしたいのです。1ご親切に甘えて、どうぞひと筆。」と申し出る。そこでメフィストフェレスは「汝等神の如くなりて善悪を知るに至らん。」¹⁷と記入する（2045-48行）。《メフィストがここで指摘しているのは、〈...〉人間の今ひとつの傲慢さ、いわば自分の哲学で宇宙のすべてが判ると思い込む傲慢さ》¹⁸であるという。

悪魔ヴォランドもまた、パトリアルシエ池で、ベルリオーズとイワンに対し同じようなことを言う。

¹⁷ これは旧約聖書「創世記」3の5を指す。なお、このことは脚注33 p.337にも記載されている。

¹⁸ 脚注7と同書。p.146

ヴォランドが、イエスはこの世には存在せず、神も信じないという2人に対し、「もし神がいないとすると、伺いたいのですが、一体誰が人間の運命や、そもそも地上におけるしきたり全体を支配しているのですか？」と尋ねると、イワンは「人間自身が支配しているのです！」と答える。その答えに対しヴォランドは、「〈...〉お尋ねしたいのですが、一体どうやって人間が支配出来ましょう？人間というのは馬鹿げた程の短い期間、そう、例えば1000年位の間の何らかの計画を立てる可能性を奪われているだけでなく、自分の明日1日すら保障も出来ないのに？ [12-13]」と再び尋ねるのである。このやり取りからも、自分たちが最も素晴らしい存在であるかのように考える人間の傲慢さに対する冷笑が現れているのが分かる。

また、ヴォランド一味がヴァリエテ劇場で公演した際、10ルーブル札を天井から降らす場面がある。劇場にいた客たちが必死になってお札をかき集めている様子を見て、ヴォランドは「彼らは—ごく普通の人間だ。お金が好きだし、だってこれはいつでもそうだったし...。〈...〉そう、浅はかなものさ [130]」と言う。しかし第24章において、一味のコロヴィエフがマルガリータに、巨匠が当てた宝くじの残金1万ルーブルを手渡しながら「私たちに他人のものは必要ありません。 [301]」と言う場面がある。ここには、人間の浅はかさ、悪魔の寛大さ、高貴さのコントラストがあり、人間の本性に対する一種の否定のようなものが見て取れるであろう。

しかしヴォランドは、いつも人間を否定している訳ではない。先ほどの10ルーブル札の雨の後、劇場の司会者ベンガリスキイは悪魔一味の黒猫ベゲモートに首をもぎ取られてしまう。いくら目障りな司会者でも、さすがに彼のことを不憫に思い始めたお客たちを見て、ヴォランドは「〈...〉慈悲は時々、彼らの心を打つ...平凡な人々よ... [130]」と言う。この場面に関して、『ブルガーコフ百科事典』“Булгаков Энциклопедия”には次のように記載されている。《Воланд и его свита только дают возможность проявиться тем порокам и добродетелям, которые заложены в людях. Например, жестокость толпы по отношению к Жоржу Бенгальскому в Театре Варьете сменяется милосердием, и первоначальное зло, когда несчастному конферансье захотели оторвать голову, становится необходимым условием для проявления добра - жалости к лишившемуся головы конферансье.》¹⁹ 「ヴォランドと彼の一味は人々の内に隠されている、あの悪徳と美徳に顕現する可能性を与えているだけである。例えば、ヴァリエテ劇場でのジョルジュ・ベンガリスキイに対する人々の厳しさは慈悲に取って代わり、不幸な司会者が頭をもぎ取られることを人々が望み始めた時の悪意は、善意の表れ—頭を失った司会者に対する憐み—の為に不可欠な条件となったのだ。」と。さらに、悪魔の大舞踏会に女主人役で出席したことに対する褒美として、マルガリータがフリーダの救済を求めると、「時に全く思いがけず、そして狡猾に、それ（憐み：筆者注）は本当に狭い亀裂の中へ入り込んでくる。 [293]」とヴォランドは口にする。

¹⁹ Б.В.Соколов“БУЛГАКОВ ЭНЦИКЛОПЕДИЯ”ЭКСМО ,2005.р.260~261

ここで注目したい点は、ヴォランドは慈悲や憐みについて述べているが、その心を持つ人間自体を否定している訳ではないという点である。ベンガリスキイの件については、慈悲を求めのお客たちの声を聞いて、司会者の首を元に戻すよう命じる。そしてマルガリータには、自分でフリーダを救済するよう述べただけで、フリーダに憐みの気持ちを持った彼女自身を否定している訳ではないのである。

次に、破壊や破滅を誘う者としてはどうであろうか？ 悪魔一味と関わりを持ったほとんどの人たちは不幸に襲われる。ベルリオーズは轢死してしまい、イワンは精神分裂症になって精神病院へ入院する。この2人を皮切りに、モスクワ中がパニックへ陥ってしまう。《Воланд, в отличие от Иешуа Га-Ноцри, считает всех людей не добрыми, а злыми. Цель его миссии в Москве как раз и заключается в выявлении злого начала в человеке. Воланд и его свита провоцируют москвичей на неблагоприятные поступки, убеждая в полной безнаказанности, а затем сами пародийно наказывают их.》²⁰ 「ヴォランドはヨシュアとは異なり、全ての人々を善良ではなく、悪意に満ちていると考えている。モスクワでの彼の使命は、まさに人間の中にある悪意の本質を暴露することにある。ヴォランドと彼の一味はモスクワ市民たちを挑発して醜い行いをさせ、それらの行為が全く咎められないことを信じ込ませ、そしてその後、自分たちでパロディーのように彼らを罰するのである。」そのモスクワ中で結果的に幸せになることが出来たのは、巨匠とマルガリータの2人だけなのである。

そのマルガリータもまた、悪魔ヴォランドに試されていた。悪魔の大舞踏会に出席する為に、故ベルリオーズのアパートへやってきたマルガリータ。ヴォランドの痛む足に薬を塗りこむ間、ヴォランドはマルガリータに「あなたは何かで苦しんでいませんか？もしかして、何か悲しいこと、気持ちを滅入らせる憂鬱なこととかあるんじゃないですか？」と聞く。本来ならばマルガリータは、巨匠の行方を一刻も早く聞きたいはずである。その為に彼女は、悪魔の大舞踏会の女主人役を引き受けたのであるから。しかしその問いに彼女は「いいえ、ご主人さま、そのようなことは何もありません。[267-268]」と答える。また、舞踏会后、巨匠に関して何も知り得ることのないまま、マルガリータは悪魔一味に暇を告げる。そこでヴォランドに「もしかして、何かお別れに言いたいことがあるのではないですか？」と聞かれ、再び「いいえ、何もありません、ご主人さま」と答える。ただ、「もし私のことがまだ必要でしたら、あなた方のお望みの全てを喜んで遂行するつもりでおります、ということ以外は。」と付け加える。その答えに満足した主人は「その通りだ！あなたは全く正しい！〈...〉私たちはあなたのことを試していたのです。〈...〉いかなる時もどんなことでも頼んではいけない！いかなる時もどんなことでも、特にあなたよりも強い者たちには。彼ら自身が申し出て、彼ら自身が全てを与えてくれるのだ。[292]」と言い、マルガリータの望みを叶えることを約束し、最終的には巨匠を彼女の元へと連れてくるのである。

²⁰ 脚注19と同書。p.265

ヴォランド自身も認めているように、一連の質問は、マルガリータを試す為であった。もし、彼女がその試練に耐えられず、巨匠のことを、つまりは自分の欲を真っ先に口に出してしまったなら、この物語はどうなっていたであろうか？マルガリータは永遠に、巨匠に再会することは出来なかったに違いない。ヴォランドという悪魔は、メフィストフェレスと同じように、破壊や破滅を誘う存在であることに疑いの余地がないことが理解されよう。

ただし、《愛情で結びつく人間関係を、はばみ、破壊しようとする者》²¹として登場しているメフィストフェレスに対し、ヴォランドは巨匠とマルガリータの関係を破壊してはいないのである。巨匠は、自分が精神を病み、一緒にいてもマルガリータを不幸にするだけだと考え、「私といっても良いことはない、それに私はきみが私と一緒に破滅してもらいたくないんだ。[153]」と、彼女のことを想うからこそ、自分から離れていくように促す場面がある。彼がヴォランドに、以前の地下室の生活に戻してもらおう願った際、小説を書く気を失ってしまった巨匠に対し、悪魔は「ところで、どうやって生きていくのですか？だって乞食のように貧しい生活をするようになりますよ。」と尋ねる。すると巨匠は「喜んで〈...〉彼女は正気に返って、私から去るでしょう...。」と答える。その返答を聞いたヴォランドは「そうは思いませんが。」と言うのである。そして2人との別れ際、「お幸せに！[304]」とまで悪魔は言う。また、2人に安らぎを与えてくれというヨシュアの頼みを、弟子のレビ・マタイが悪魔に伝えにきた時には、「招かれざる、しかし予見されていた客[374]」と口にする。まるで、巨匠とマルガリータの運命を気にかけていたかのような発言である。

「そうは思いませんが。」「お幸せに！」「予見されていた客」という発言を見る限り、巨匠とマルガリータにとって、ヴォランドは非常に友好的な存在、ロマンチックな存在には思われないだろうか？

しかし、やはりヴォランドは悪魔であることに変わりはないのである。レビ・マタイがヴォランドに、巨匠だけでなく、マルガリータも一緒に連れて行ってほしいと願うと、彼は「お前がいなかったら、私たちはそのことについて決して気付かなかっただろう。[376]」と答えている。安らぎを与えるべきだと考えた相手はピラトの小説を書いた巨匠だけであって、マルガリータのことは一切お構いなしという様子が見て取れる。つまり、先ほどの友好的でロマンチストとしての発言は全て、客観的意見であって、ヴォランドは本質的には自分とは関わりのないことに対しては無関心なのだと言うことができるのである。

²¹ 脚注11と同論文。p.58

V. 両者の決定的な違い

ヴォランドは非常に客観的で、他人に無関心な悪魔であることが分かった。そしてメフィストフェレスもまた、同様だといえる。嬰兒殺しの罪で牢獄に繋がれたグレートヘンを救出するよう、ファウストはメフィストフェレスに命令する。すると悪魔が、「—あれを助けろと仰しやるが—いったいあれを破滅におとし入れたのは誰ですか。私ですか、あなたですか。」と問う場面が「曇れる日」に描かれている(313頁36—37行)。この言葉からもメフィストフェレスは、グレートヘンに対して無関心で、この場合はファウストに対しても、客観的で無慈悲だということが見て取れる。なぜならば、メフィストフェレスの関心はファウストを手に入れることであり、ファウストが何を手に入れるかには、全く関心がないからである。

これまで、メフィストフェレスとヴォランドの類似点や相違点をいくつか挙げて検討してきた。では、両悪魔の決定的な違いとは一体何であろうか？それは、主との主従関係の有無にあると筆者は考える。

メフィストフェレスと主との主従関係については、本稿Ⅲですでに述べたとおりである。では、ヴォランドと主との関係は如何なるものであろうか？そもそも、『巨匠とマルガリータ』に主は登場しない。ヨシュアは光の世界に住む者として描かれているが、その光を統べる者としては、はっきりとは述べられていないのである。従って本論では、『巨匠とマルガリータ』において、光の世界の者が闇の世界の者を包括しているか否かに焦点を合わせて検討してみたい。

巨匠が、マルガリータと自分の行く先がピラトの向かう方向なのか、やって来た方向へ引き返すのかと尋ねると、ヴォランドは「しかし本当に私があなたたちに勧めていることは、そしてヨシュアがあなたたちの為に私に頼んだことは、あなたたちの為にですよ、それはより良いことなのです。[398]」と答える場面がある。これは《Воланд, как и Иешуа, понимает, что "голым светом" способен наслаждаться лишь преданный, но догматичный Левий Матвей, а не гениальный Мастер.》

「ヴォランドはヨシュアと同じく、「無垢な光」を楽しむ能力があるのは、献身的だが、教条主義的なレビ・マタイのような者であり、決して天才的な巨匠ではないと理解している。」ということの表れであり、ヴォランドとヨシュアの意見が一致していることが分かる。つまり、《Именно Воланд с его скепсисом и сомнением, видящий мир во всех его противоречиях (каким видит его и истинный художник), лучше всего может обеспечить главному герою достойную награду.》²²

「世界を全ての矛盾の中で見ている(真の芸術家も世界をそう見ているように)、まさに懐疑心と疑惑を持つヴォランドこそ、何よりも主人公に対して、彼にふさわしい褒美を保証することが出来る。」のであり、ヨシュアもそれを認めていることが分かる。

²² 脚注19と同書。p.264

また、本章ではヴォランドとヨシュアの弟子レビ・マタイとの会話について触れた。

《Диалектическое единство, взаимодополняемость добра и зла наиболее полно раскрывается в словах Воланда, обращенных к Леввию Матвею, отказавшемуся пожелать здоровья "духу зла и повелителю теней"》²³「善と悪の弁証法的統一、相互補完性は、「悪の霊で影の支配者」に健康を願うことを断ったレビ・マタイに向けられたヴォランドの言葉の中で完全に明らかとなる。」その部分を引用してみたい。

「そして巨匠と一緒に連れて行き、彼に安らぎを与えることを（ヨシュアは：筆者注）お前に頼んでいるのだ。」

「〈…〉行われるであろうと伝えよ。」 [375-376]

ヴォランドに対して、光の世界にいるヨシュアは決して命令口調ではなく、またヴォランドの返答の仕方からも、彼の強大な闇の力が光の世界に対しても屈していないことが窺えるであろう。ここは、《マタイがヨシュアの依頼を携えてくるモチーフは、草稿では、ヨシュアの命令ということになっていた。⁽⁴⁸⁾命令が依頼に変わる事によって、ヴォランドの格は、ヨシュアと同等²⁴となったのである。

これらの点を踏まえると、『ファウスト』において、主と悪魔メフィストフェレスの間には主従関係が成り立っていたのに対し、『巨匠とマルガリータ』では、光の世界の者ヨシュアと闇の世界の者ヴォランドの間に主従関係は成立していないということが理解されよう。

VI 結論

ここまで、『巨匠とマルガリータ』と『ファウスト』両作品に登場する悪魔について比較を行い、その類似点と相違点を明らかにしてきた。それは、ブルガーコフが『ファウスト』からの一節をエピグラフに使用した理由、つまり2作品に通じるものは何であるかを調べる為であった。『巨匠とマルガリータ』に関して、近間由美子氏の「『巨匠とマルガリータ』—ブルガーコフの黙示録—」²⁵には非常に興味深い見解が述べられている。

《悪魔達が引き起こした数々の奇怪な事件にもかかわらず、結局モスクワには何も変化がなかったということである。進化する事のない現世の歴史がここに見られる。》²⁶もしそう言えるのであれば、これはつまり、混乱や破壊が行われた場所に再び何らかの建設、つまり生成が行われたのだと捉える

²³ 脚注19と同書。p.261

²⁴ 秋元 里予「《Мастер и Маргарита》研究 —形象の源泉をめぐって—」『Rusistika』東京大学文学部ロシア文学研究室、1981.6。p.106 ちなみに⁽⁴⁸⁾はЧудакова:Творческая романа М.Булгакова «Маснер и Иаргариты». «Вопросы литературы» №1. 1976 p.240

²⁵ 近間由美子「『巨匠とマルガリータ』—ブルガーコフの黙示録—」『ロシア文化研究第11号』早稲田大学ロシア文学会、2004。

²⁶ 同上。p.137

ことは出来ないだろうか？

さらに、悪魔ヴォランダの最初の被害者となった詩人のイワン・ベズドームヌイがエピローグに再び登場することに関して、『巨匠とマルガリータ』は、バトン・リレーのように受け継がれていく終わりのない黙示録であるという感をエピローグから受ける。〈...〉『巨匠とマルガリータ』の結末は、巨匠という一人の小説家の物語であると同時に、ベズドームヌイという別の詩人の物語の始まりでもある²⁷と、同氏は述べている。巨匠の物語の終焉と、イワンの物語の誕生という部分にも破壊と生成が見て取れることは言うまでもないであろう。

また『ファウスト』では、「天上の序曲」の場面において、悪魔メフィストフェレスは主に対し、次のように訴えている（281-296行）。

メフィストーフェレス

この、地上の小神様はいつも同じ工合にできていて、

天地開闢の日と同じくへんちきりんな存在です。〈...〉

気に入りませんかあ、あすこ（地上の国：筆者注）はいつも変わらず困ったもんです。

悪魔メフィストフェレスが、地霊空間に存在している人間について不満を感じていることが窺え、また、人間界が不変であることも分かる。

筆者は、ここで言う“不変”とは、途切れることのない生成と破壊の連続から生まれる“流れ”のことを指していると考え。これらの点を踏まえると、『ファウスト』にも『巨匠とマルガリータ』にも、生成と破壊の流れが脈々と続く、不変の世の中が見て取ることが出来るであろう。その中で、ヴォランダもメフィストフェレスも《永遠の生成と破壊という運動において、破壊を自らの仕事としているのであり、それが悪と呼ばれることの内実だということです。〈...〉そうした否定が、実はさらに大きな肯定のための否定、永遠の運動である地霊空間のダイナミズム、そこでの生命の絶えざる働きを保つための否定²⁸の象徴なのであり、まさに両悪魔は必要不可欠な存在だといえる。これはまさに弁証法である。《テーゼ》が《ジンテーゼ》に向かうには、《アンチテーゼ》の存在が必要である。この世はその永遠の繰り返しなのである。そして悪魔の担っている役割を浮き彫りにするのがまさに、

...Так, кто ж ты, наконец?

— Я — часть той силы, что вечно хочет зла и вечно совершает благо. [5]

...それで結局お前は何者なのだ？

— 私は絶えず悪を欲し、絶えず善を成し遂げる、あの力の一部です。

²⁷ 脚注25と同論文。p.138

²⁸ 脚注7と同書。p.149

という、『巨匠とマルガリータ』のエピグラフにおいて引用された、あの会話となるのだと筆者は考える。

また、論文「《Мастер и Маргарита》研究 —形象の源泉をめぐって—」の著者である秋元里予氏は悪魔ヴォランドについて、「ヴォランドは、メフィストのような闇の一部ではなく、光の支配者ヨシュアと同格の絶対者、闇の支配者なのである。」²⁹と述べている。ヴォランドとヨシュアの関係が同格であるということについては筆者も同意見であるが、メフィストフェレスに関して、もう少し付け加えたいと思う。なぜならば筆者は、メフィストフェレスが闇の一部とは思えないからである。

悪魔メフィストフェレスがファウストの前に現れた時、悪魔は自身のことを「常に悪を欲して、/しかも常に善を成す、あの力の一部分です。」と述べている（1336-37行）。この言葉からも分かるように、メフィストフェレスは闇の一部とは言っていない。その自己紹介には、次のような続きがある（1338-44行）。

メフィストーフェレス

私は常に否定をするところの霊なんです。

それも当然のことです。なぜとって、一切の生じ来るものは、

滅びるだけの値打のものなんです。

それくらいならいっそ生じてこない方がよいわけです。

そこであなた方が罪だとか破壊だとか、

要するに悪と呼んでおられるものは、

すべて私の本来の領分なんです。

この言葉にも、「自分は地霊空間における永遠の生成と破壊という運動において、破壊を自らの仕事としているのであり、それが悪と呼ばれることの内実だということです。そして、天主の言葉、メフィストの最初の自己紹介は、そうした否定が、実はさらに大きな肯定のための否定、永遠の運動である地霊空間のダイナミズム、そこでの生命の絶えざる働きを保つための否定であることを示したもの」³⁰だという意味が込められている（ここで言う天主の言葉とは、本稿Ⅲで触れた「人間の活動はとかく弛みがちなもので、/得てして無制限の休息を欲する。/だからわしは彼らに仲間をつけてやって、/彼らを刺戟したり促したり、悪魔としての仕事をさせるのだ。（340-43行）」という部分のことを指す）。

本稿Ⅲでも述べたように、メフィストフェレスの存在が必要悪なものには理由があり、この世のあらゆる生の存続の為に必要な破壊が、メフィストフェレスの使命だということである。だからこそ自己

²⁹ 脚注24と同書。p.106~107

³⁰ 脚注7と同書。p.149

紹介の際に「常に悪を欲して、/しかも常に善を成す、あの力の一部分です。」と述べているのであり、決して単なる闇の一部ではないということが理解されよう。

これらの解釈を踏まえて筆者は、ヴォラントとメフィストフェレスは、主との主従関係に相違点は認められたが、悪魔としての在り方は同等であると位置付けたい。

しかし、『ファウスト』に登場する悪魔とは、天なる主の一部として悪行を成すという役割³¹を担った存在である。本稿Vでも述べたように、『巨匠とマルガリータ』では闇の支配者ヴォラントと、光に住む者との間に主従関係が見受けられなかった。その訳とは一体何であろうか？なぜ、『巨匠とマルガリータ』にはこれほどまでに悪魔の存在が大きく描かれているのだろうか？その答えを筆者は、巨匠とマルガリータが向かった先に見出したいと思う。

巨匠によって救済されたピラトは、ヨシュアのいる光の方へ、愛犬とともに進んでいく。それを見た巨匠はヴォラントに、自分はピラトたちの方へ進むのか、今来た道を引き返すのかと尋ねる。答えはそのどちらでもなく、ヴォラント自身は「この道に沿って行きなさい、巨匠よ、この道を！[339]」と言うと別の方向の深淵へ消えてしまう。そして、巨匠とマルガリータの2人が辿りついたのは、安らぎの地、永遠の隠れ家であった。光の世界に住むヨシュアも、そして闇の支配者ヴォラントも、巨匠には光の世界でも闇の世界でもなく、安らぎが与えられるべきだと判断されたのである。

ただし、『巨匠とマルガリータ』第32章には、永遠の隠れ家には昼も夜も存在していることが、ヴォラントの発言からも見受けられる[339]。つまり永遠の隠れ家がある安らぎの地とは、光の世界でも闇の世界でもないという訳ではなく、光にも闇にも属する中間的な、そして人間界とは異なる、神聖な空間であると位置付けることは出来ないであろうか？

巨匠が安らぎの地に導かれる為には、闇の存在が必要不可欠であった。だからこそブルガーコフは、敢えて闇の存在、つまり悪魔ヴォラント一味を中心とした物語を執筆したのではないだろうか？そうすることによって、より闇の部分が浮き彫りとなり、安らぎの地の存在の意義が増したように思えてならない。ブルガーコフが『ファウスト』からの一節をエピグラフに使用した理由は、ヴォラントとメフィストフェレスの、悪魔としての在り方が同等であるだけでなく、安らぎの地を確たるものとする為でもあると、筆者は考える。

引用・参考文献

1. Булгаков, М. А. “Мастер и Маргарита” Санкт-Петербург. 2005. なお、このテキストは Булгаков М. А. Собр. Соч.: в 5 т. М., 1990. Т. 5 に基づいている。
2. Булгаков, М. А. “Полное собрание редакций и вариантов романа «Мастер и Маргарита»” Москва. 2006.
3. Beck, C. H. “Goethes Werke Band III” C. H. Beck München. 1981.

³¹ 弁神論的存在であるという解釈もある。

- 4.Maskaleris,M. “Mikhail Bulgakov’s The Master and Margarita and Its affinities with Goethe’s Faust” San Francisco State University.1985.
- 5.Pittman,R.H.“The Writer’s Divided Self in Bulgakov’s *The Master and Margarita*” St Antony’s / Macmillan Series.1991.
- 6.Соколов,Б.В.“Булгаков Энциклопедия”Москва.2005.
- 7.“Хождение Богородицы по мукамъ”(Памятники литературы Древней Руси □век Москва.1980.C.166-183 所収)
- 8.石原 公道「「巨匠」の夢・ブルガーコフの現実」『ロシア文化研究 第13号』早稲田大学ロシア文学会、2006年。
- 9.石原 公道「ミハイル・ブルガーコフの消された手紙」『文学研究科紀要 第46輯 第2分冊』早稲田大学大学院、2000年。
- 10.石原 公道「研究ノート ブルガーコフとスターリン —1920年代末のある文学風景—」『ロシア文化研究 第10号』早稲田大学ロシア文学会、2003年。
- 11.岩原 宏子「ミハイル・ブルガーコフの初期作品における「光」と「頭部」のモチーフについて」『北海道東海大学紀要 人文社会科学系 第12号』北海道東海大学、1999年。
- 12.岩原 宏子「ミハイル・ブルガーコフの『白衛軍』論」『北海道東海大学紀要 人文社会科学系 第13号』北海道東海大学、2000年。
- 13.大森 雅子「『巨匠とマルガリータ』におけるブルガーコフの世界観 —フロレンスキーの宇宙論を通じた作品分析—」『ロシア語ロシア文学研究 第34号』日本ロシア文学会、2002年p.1-8所収。
- 14.大森 雅子「ブルガーコフとゴゴリ —1920年代後半～30年代初頭ソ連の社会的・文化的コンテクストにおける戯曲『死せる魂』—」『スラヴ文化研究vol.7』東京外国語大学、2007年。
- 15.亀山 郁夫『磔のロシア スターリンと芸術家たち』岩波書店、2002年。
- 16.菊池 嘉人「ファゴットとベルリオーズ —M・ブルガーコフ『マスターとマルガリータ』の一側面—」『ロシア文化研究 第3号』早稲田大学ロシア文学会、1996年。
- 17.木村 直司『ゲーテ研究』南窓社、1976年。
- 18.久保木 茂人「若き日のブルガーコフ —医師として—」『ロシア文化研究 第2号』早稲田大学ロシア文学会、1995年。
- 19.ゲーテ『ファウスト 第一部』相良守峯訳、岩波書店、1958年。
- 20.ゲーテ『ファウスト 第二部』相良守峯訳、岩波書店、1958年。
- 21.ゲーテ『ゲーテ全集*9*自伝 詩と真実 第1部・第2部』山崎章甫・河原忠彦訳、潮出版社、1979年。
- 22.ゲティンクス、フレッド『悪魔の辞典』大瀧啓祐訳、青土社、1992年。
- 23.サハロフ、フセヴォロド『ブルガーコフ 作家の運命』川崎浹・久保木茂人訳、群像社、2001年。
- 24.柴田 翔『ゲーテ「ファウスト」を読む』岩波書店、1985年。
- 25.柴田 翔『「ファウスト第I部」を読む』白水社、1997年。
- 26.新共同訳『聖書 旧約聖書続編つき』日本聖書協会、2009年。
- 27.杉谷 倫枝「語り手が描き出す「詩人」と「ローマ」—ブルガーコフの戯曲『死せる魂』から『巨匠とマルガリータ』にいたる創作過程—」『SLAVIANA 22号』東京外国語大学スラヴ系言語文化研究会、2007年。
- 28.近間 由美子「『巨匠とマルガリータ』—ブルガーコフの黙示録—」『ロシア文化研究 第11号』早稲田大学ロシア文学会、2004年、p.129-140所収。
- 29.近間 由美子「『白衛軍』における古都キエフの運命」『ロシア文化研究 第10号』早稲田大学ロシア文学会、2003年。
- 30.ブルガーコフ『悪魔物語・運命の卵』水野忠夫訳、岩波書店、2003年。
- 31.ブルガーコフ『犬の心臓』水野忠夫訳、河出書房新社、1971年。
- 32.ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ 第1の書』法木綾子訳、群像社、2000年。
- 33.ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ 第2の書』法木綾子訳、群像社、2000年。
- 34.ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』水野忠夫訳、河出書房新社、2008年。
- 35.ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』水野忠夫訳、集英社、1976年。
- 36.ブルガーコフ『劇場』水野忠夫訳、白水社、1972年。
- 37.ブルガーコフ『モルヒネ』町田清朗訳、未知谷、2005年。
- 38.水野 忠夫『ロシア雑記』南雲堂、1987年。

- 39.水野 忠敏「ゲーテ・ファウストの登場人物 —その作像— 第一部」『広島大學文學部紀要32(特輯3)』広島大学文学部[編]、1973年。
- 40.宮澤 淳一「『福音書』のメフィストフェレス —ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』にひそむもうひとりの悪魔—」『ロシア語ロシア文学研究 第23号』日本ロシア文学会、1991年、p.15-27所収。
- 41.宮澤 淳一「ブルガーコフ『巨匠とマルガリータ』における悪魔ヴォランダの役割と「黒魔術の夕べ」について」『早稲田大学大学院 文学研究科紀要 別冊第20集』早稲田大学、1993年、p.59-67所収。
- 42.和田 春樹編『ロシア史』山川出版社、2002年。